|  |
| --- |
| Full-Scape Wizard |

|  |
| --- |
| 2020年3月15日 |

１章＿村編

　暁（あかつき）メグルは２時間前に訪れたパーキングエリアの売店に掲載されていたポスターを思い出していた。

　赤の太文字ゴシック体で書かれた『シートベルトを締めよう。命は１つ！』のメッセージ。背景にはボンネットから運転席がプレスされたかのようにペシャンコになった軽自動車の写真。

　メグルはシートベルトを締めていようが、締めてなかろうがどっちみち死ぬだろう。そう思いながらポスターを眺めていた。

　休憩から２時間後、高速道路を降り、見慣れた一般道を乗りなれた軽自動車で進む。メグルの目指す先は自宅である。

　右側には公園がある。メグルにとっての１番古い記憶は母の手を握り、その公園から自宅に戻る風景だった。公園沿いの道は小中高の通学ルートであり、通勤ルートでもあった。

　公園の入り口に差し掛かるちょうどその時、公園からボールが車道に転がってきた。反射的にメグルはブレーキを思いっきり踏み込む。いわゆる「かもしれない運転」ってやつだ。子供が飛び出してくるかもしれない。彼はそう思った。

　だけども、子供は飛び出してくることはなかった。メグルは5歳ほどの男の子が公園の入り口から左右の安全確認をするのを見た。

　最近の子はしっかりしてるなぁ。そう感心したと同時に、背中に衝撃が走る。メグルの軽自動車は追突され、その勢いで反対車線に突っ込んだ。目の前に迫ってくるのは４トントラック。

　視界がスローモーションになり、今まで見てきた風景が次々とよみがえってくる。そんな走馬灯の最後に今まで行ったことのない風景が入りこんできた。風車、畑を耕す牛、藁ぶきの屋根……。やがて視界が白くかすんでいく。メグルの意識はそこで途切れた。

　まぶた越しに太陽を感じる。穏やかな風に吹かれて揺れる芝草がこそばゆい。

　メグルが意識を取り戻すと丘の上に寝転んでた。

　周囲には風車、畑を耕す牛、藁ぶきの屋根……。

「この景色は、走馬灯の最後の……。テレビで見た臨死体験と随分違うな」と辺りを見渡しながらメグルはつぶやく。

　周りの風景はファンタジー映画やRPGに出てくる農村のようだった。

　メグルは丘を下り民家のある方を向かっていった。轍に沿って歩いている途中で道標を発見した。それは今まで見たこともない文字で書かれていた。メグルは不安を思えながらも歩き続ける。

　石橋を渡り、左右に畑がある道を進む。人影はあるが、畑の奥の方で作業しているため声は届きそうもない。どことなくメグルを避けている風にも感じられる。

　家の庭先で息子・娘と一緒に、革をなめす男がいた。メグルが声をかけようと近付くとすると男は子供たちに家に入るように指示し、近くに立てかけていた鉈を手に取った。

　男はメグルに向かって怒鳴る。話す言語はメグルには理解不能だったが。伝えたいメッセージは予想がついた。

「俺の家族に近寄るな。さもないと叩き切ってやる」

　男の怒鳴り声につられてか、周りに村人たちが集まってきた。各々、彼らなり武器――たいていは農具――を携えている。その中の一人がメグルにピッチフォーク――干し草に突き刺すフォークみたいな農具――を突き付けてきた。身を守ろうとして、メグルは両手を突き出す。その時、メグルは彼らの目に恐怖が浮かんだのを感じ取った。と同時にメグルはタックル受けて地面に倒れこむ。すぐさま、村の男たちの華麗なチームワークによってメグルはわら縄で縛れらていった。

　わら縄で拘束されたメグルは農村の中央に位置する広場につれていかれた。周りには村人が集まっている。

　感じられる雰囲気は２つ。１つ目は異邦人に対する警戒・恐怖。２つ目はその異邦人をとらえた勇敢な男達への称賛だ。特にメグルにタックルをした若者は英雄扱いのようだ。内容はわからないが「へロス」と何度も掛け声が聞こえる。彼の名前だろうか。

　広場の端でメグルをしきりに確認しながら、白熱した議論をしている一団があった。議論がひと段落すると、長老と思しき老人とローブを身にまとった壮年の男がメグルに近づいてきた。

　老人はわら縄に縛られたメグルの目をじっと見た。ローブの男に目配せをし、先ほどまで議論していた一団に戻っていった。

　ローブの男はメグルを縛るわら縄を手を触れた。男はここじゃないどこかを見るような、はるか遠くに焦点を合わせるような、そんなそぶりを一瞬だけ見せ、小声で何かをつぶやいた。するとメグルを縛っていたわら縄の一部が焼き切れた。

　ローブの男はメグルに向かって、自分についてくるように身振りで伝えた。

　メグルが立ち止まっていると、さっき見せた遠くみるようなそぶりをし、何かをつぶやいた。わら縄が焼き切れる時とは別の言葉を。すると、メグルの背後から強い風が吹いてきた。風に押されてメグルは一歩前に進んだ。

　メグルは周囲を見渡したが、他の人は風にあおられている様子は見受けられない。風は彼一人に対して吹いている様だ。

　メグルはローブの男に従い、彼の後を歩いていった。

　メグルはローブの男の家にたどり着いた。村の北東に位置するレンガ造りの建物だ。

　ローブの男はメグルを招きいれた。男はメグルをダイニングまで案内し、椅子に座るように促す。

　メグルが椅子に座ると男が目の前にしゃがみ込んだ。男がメグルに向かって手をかざし、三種類の言葉を唱えた。はじめは目、次は口、最後に耳。見ざる聞かざる言わざる。そんな言葉がメグルの頭をよぎった。

　男はメグルの向かい側の椅子に腰かける。

「私の言っていることが理解できるか？」

　日本語でメグルに向かって誰かが声をかけてきた。メグルはあたりを見回した。だが、室内にはメグルとローブの男の二人だけしかいない。

「その様子だと君にかけた翻訳魔法は機能しているようだな。話しかけているのは――」ローブの男は自分を指さして言葉を続ける。「私だよ」

　メグルは驚きのあまり開いた口がふさがらない。舌が回らず思ったように声が出ないのでうなずくことで応えた。

「私の名はエデュー・ジェザーヴィーヌ。魔法使いだ。君の名は――」

　エデューの言葉を遮ってメグルがしゃべりだす。「誤解です。信じてください。おれは傷つけるつもりなんてないんです。そもそも、ここはどこな――」言い終わる前にエデューが止める。

「無実なのは分かった。いったん落ち着け。……よし、では答えてくれ」

「……えーと、何でしたっけ？　その……魔法使いさん？」

「エデューだ。君の名前は何か質問している」

「みすません。おれはメグルっていいます」

「珍しい響きだだな。どこから来た？」

「千葉県」

「チバケン？　知らないな。もっと大雑把な区分で教えてくれ。もしかしたら分かるかもしれない」

「日本」

「もっと広く」

「東アジア」

「もう一声」

「え!?　これより広い区分となると……。地球になると思います」

「それはスケールが大きすぎる。この惑星そのものじゃないか。少し考えさせてくれ」

　エデューが立ち上がり、室内を往復しながら考えを口にだす。メグルは断片的に単語を聞き取った。新大陸、予言、地球、偶然の一致。エデューはふと足を止めた。

「おそらく君にとっての地球と、私が認識している地球は翻訳魔法の結果偶然『地球』という単語に集約されたのだろう。人々が住む惑星を単語としてな。だが、まったくの別物だろう。君は異なる世界からやってきた訪問者だ」

「異世界転生。いや、異世界転移ってわけですか」

「呑み込みが早いな。君の世界にも異世界からの訪問者が来るという予言があるのか」

「予言ってわけじゃないですけど、似たような話はたくさんあります。最近では『来る』より『行く』パターンが主流ですけどね」

「予言がどうこう言ってましたけど、それがおれが捕えられて、魔女裁判みたいな状況になった理由ですか」とメグルが問いかける。「魔女裁判が何かわからないが、おそらくは予言による先入観だろう。予言の内容をざっくり言うと、『来訪歴1296年にだれもたどり着けない遠くから来た者が災いをもたらすであろう』といったところかな」

「――つまり、災いをもたらす者とやらが、おれだと思われている？」

「そういうことだ。だが、決め手になったには――」エデューがメグルに向かって、手を突き出す。手は野球ボールの握るように親指・人差し指・中指で虚空を鷲掴みしている。「《アモル・アクシー》」

　エデューの三本の指の間に稲妻が走る。魔法によるスタンガン。メグルはそう思った。

「おそらく、君の身を守る仕草が攻撃魔法の予備動作に見えたのだろう。こんな感じに、攻撃魔法は相手に向かって手を突き出すものが多い」

　メグルは農具を突き付けられたときに、両手を前に出して防御しようとしたこと思い返した。

「誤解ですね。おれは魔法なんて一切使えませんよ」

「そうとも限らないぞ。魔法自体は使うだけなら難しくない。ただ、たいていの場合は魔法を使うよりもほかの手段を使う方が手っ取り早い。例えば、広場で私が君を縛っているわら縄を焼き切っただろ。あの時使った魔法も９割の人は使うだけならできる。ただし、火力が低すぎて焼き切るまでにじわじわと２時間かかる。そんなことをしているんだったら、ナイフで切った方が早い。要は、ほとんどの人間は魔法使いなんだ。だけど、幾つも目的を達成する手段がある中でわざわざ魔法を選びたくなるほど、魔法を上手に使える人は限られているってだけだ」

「それって結局、まともに使えるのは限られた人だけになりませんか。たぶんおれは、多数派の一応魔法は使えなくもない人だと思いますよ。下手すれば使えない方の１割かも」

「簡単な魔法だったら教えてやるが、どうする？」

「たぶん時間の無駄だと思いますけど……」

「そうとも、たいていの人は適性無しだ。でも考えてもみろ。失敗した場合は普通のまま、いわば現状維持だ。成功したら、晴れて魔法使いの仲間入りだ。分がいい賭けだと思わないか」

　エデューはメグルが応える前に、彼の首根っこをつかみ庭先に連れ出した。

　庭先でエデューがメグルに、オレンジの木を示しながら説明を始める。

「ちょっとしたゲームだ。物理衝撃魔法でこの木を揺らして、オレンジを落とす。落としたオレンジは君のものだ」

　メグルはオレンジの木を観察する。高さが２メートル。幹の太さが30センチほど。自分の二の腕より少し太いくらいか……。オレンジはオレンジ色ではなく青い。熟していないのか、青い状態で食べる品種であるのかは不明だ。そういう品種であってくれとメグルは思った。

「さてと、魔法の使い方についてだ。魔法を行使には３つの要素が必要になる。印、呪文、そして魔力だ」

「まずは印について、魔力を放出するための特定の形のことだ。今回を教える魔法は手をこの形にする」エデューがオレンジに向かって手をかざし、メグルを呼び寄せて手の形を見るように促す。

　メグルは手の形を確認する。エデューの印――手の形――は張り手や掌底に酷似している。掌を正面に向け、各指の第一関節と第二関節を曲げている。

「そして、呪文を唱える。《カイナ・オウ》！」

　オレンジが何かにぶつかったかのごとく振り子のように揺れ、やがてオレンジは揺れに耐え切れずに地面に落下した。

「とまぁ、こんな感じだ」

　メグルもオレンジに掌を向け。深く息を吐きだす。肺に息が戻ってきたの確認して「《カイナ・オウ》！」と声を張り上げる。……が、オレンジは落ちなかった、そもそも揺れてすらなかった。

「そういえば、魔力について説明し損ねたな」エデューが笑いながら言う。「どうやって、魔力を引き出すつもりだったんだ」

「強く念じれば出せるものかと。落ちろーって感じで」

「残念だが念じるだけは魔力は引き出せない、私たち魔法使いが用いる魔力は土地から引き出すんだ」

「土地……ですか」

「そう、土地だ。土地は魔力を持っている。我々魔法使いは土地から魔力を引き出し魔法を行使する。魔力を引き出す方法は、その土地を思い浮かべることだ。また、同じ土地から連続して魔力を引き出すことはできない」

「試してみます」

　目を閉じる。メグルが思い浮かべているのは県境の川の上を通る橋の風景だ。川の両側面に土手があり、頂上はサイクリングロードなっている。土手と川の間の茂み、野球グラウンド。土手の外側には田んぼが広がっている。そして、その場で見ているかのように緻密な映像を自分の内側に描き出す。

「《カイナ・オウ》」

　今度は成功した。やりすぎてしまったとも言えるかもしれない。葉をあらかた吹き飛ばし、幹をへし折り、オレンジの半数を押しつぶした。

「あの木ってへし折っても問題ない木ですよね」呆然としながらメグルが問いかける。

「気にするな、来年からオレンジを食べたくなったら、市場で買う必要があるようになっただけだ。それはそうと、予想以上の出来だ。初めてだよな？」

「初めてですよ、わざわざ嘘なんてつきません」

「どうだ、弟子になる気はないか？」

「少し考えさせてください。すこし風を浴びてきます」

　メグルはオレンジの中から、中身が果実が汚れていないもの拾った。

「落としたオレンジはおれのものでいいんですよね」

　メグルはエデューから背を向けて歩き出した。

　メグルは橙色の夕日焼けの道を青い果実を片手に歩く。そういえば、橙色とオレンジ色って何が違うんだ。彼はそんなことを思いながら、青いオレンジの皮をむいていく。現れた果肉は薄い黄緑色だ。その中の一房を口に運ぶ。

「うっ」あまりの酸っぱさに路肩にオレンジを吐き出した。「やっぱり、まだ食うべきじゃないや」

「悪魔め、エデューさんのところから逃げ出して来たな」

　メグルの後ろから声が響く。振り向くとそこには、昼間メグルにタックルをかけ、村に広場ではへロスと呼ばれていた青年が立っていた。メグルはしどろもどろに弁明を始めた。

「違うんだ……。誤解……、誤解です！　逃げてなんかいません。むしろ、弟子入りする方向で考えてるくら――」

「嘘つけ！」メグルの言葉をさえぎりへロスが言い放つ。「エデューさんに正攻法で敵わないと知って、周りを騙す作戦に切り替えたんだろ。怪しげな魔術で俺たちの言葉を使いやがって」

「今、言葉が通じているのはそのエデューさんのおかげなんだけど……」

「お前の言葉になんざ聞くもんか！」へロスの力強い声が響き渡る。

　一連の会話をからメグルは対応を考えていた。これはおれからは絶対説得できないやつだ。エデューさんの口からみんなに説明してもらう必要がある。そして彼がいるのが、この英雄君の向こうなんだよな。今のところは素手みたいだけど……、いや、取っ組み合いをしたら負けるのは俺の方だろう。

　ふと気が付くと、へロスに後ろから援軍が駆けつけてくるのが見えた。２人の若い男で、一人はわら縄を、もう一人は鎌を携えている。

「みんな、こっちだ！　あいつを捕まえるぞ！　あいつの声には耳を貸すな、俺たちを騙すつもりだぞ」へロス君が援軍達に伝える。

　メグルは男達とは逆の方角に走りだした。その方角はエデューの家への方角とも逆だった。

　ルナエは鎌を片手に、エデューの家を目指していた。

「俺たちはあの悪魔を追いかける。お前はエデューさんを呼びに行ってくれ」へロスからの指示を思い返す。

　ルナエはエデューの家にたどり着いた。

「なんだこれは？」へし折れた木と散らかったオレンジを見てルナエがつぶやく。戦いの跡だろうか。

「んー」庭先にいたエデューがオレンジを片手に口をすぼめながら、ルナエに手を振る。口に入っていたオレンジを飲み込み。「どうした、ルナエ。何か用か？」

「助けてください。仲間があいつを追っていて」

「あいつって昼間にわら縄でぐるぐる巻きにされていた『あいつ』か」

「その『あいつ』です。これはあいつがやったんでか？」へし折れた、オレンジの木を示しながらエデューに問いかける。

「ああ、あいつの仕業だ」

　ルナエの顔が青ざめる。あいつを本気で怒らせるとまずいんじゃないか。

「よし分かった。私も助けに行こう」ルナエの表情を見てエデューがルナエの肩に手を置く。「お前さんも一口どうだ」そう言って青いオレンジを差し出す。

　ルナエはオレンジを一房ほおばり、口をすぼめる。「酸っぱい」

「うん、やっぱりまだ熟してないよな」エデューがつぶやく。

　二人はメグルと彼を追いかけるへロス達のもとへ走った。

　メグルはへロス達から逃げ続けて、農村中央部の広場までたどり着いた。

　走りながら後ろを振り返る。追ってくるのはへロスとわら縄の男だ。

　へロスとわら縄の男は二手に分かれて、メグルを追い立てる。土地勘とチームワークのかいあって、二人はメグルを袋小路に追い詰める。路地の奥は出店のテントが保管されており、手でどかす時間はメグルにはなかった。

　二人はメグルに襲い掛かる。メグルは手にしていたオレンジ握り潰し、果汁をわら縄の男に吹き付ける。

「うっ……」わら縄の男が壁に体をあずける。「目が……、へロス、すまない。少しの間そいつを抑えてくれ……」

「任せろ」へロスがメグルに飛びかかる。

　メグルは地面に押し倒される。倒れた時の衝撃でオレンジの路地の奥に放り出された。へロスはメグルに馬乗りになる。

　メグルがへロスを見上げる。腕っぷしではどうにもならないなこれは。可能性があるとしたら魔法だ。でも、オレンジの幹をへし折る威力だ。人に打てない。威力を落とすには……。

　エデューの言葉を思い出す。「引き出す魔力を方法は、その土地は思い浮かべること」

　本当に一瞬だけ思い出そう。おれは今、インターチェンジを出たところだ。メグルは一瞬だけ目をつぶる。まぶたの裏側に山のシルエットが焼き付く。

「《カイナ・オウ》」メグルはへロスに掌底をへロスに向け、「《カイナ・オウ》」と唱えた。

　衝撃によってへロスがメグルの上から転がり落ちる。彼はその勢いのまま、壁に頭をぶつけた。

　へロスがうめき声を上げながら、手の平で頭をさする。違和感を感じ手の平を確認すると、血でにじんでいた。

　メグルはへロスを視界から外し、袋小路から逃げ出す。追手だった二人は追いかけてこないようだ。

　メグルは周囲を確認しながら路地を走る。建物の死角からこちらに近づいてくる靴音が聞こえてきた。

　メグルは衝撃呪文を放つ準備をする。建物の影から刃が光る。

「思いのほか、やんちゃじゃないか」

　メグルの真後ろから男の声がした。回り込まれた？

「《カイナ・オウ》」メグルは即座に背後の男へ衝撃魔法を放つ。

「《テラス・カーキネン》」それと同時に男も呪文を唱える。

　メグルと男との間に光の壁が出現する。壁の角度はメグルから見て、斜め上を面を向けている。メグルが放った衝撃波は光の壁を反射し、メグルの頭の上に位置する建物の煙突を砕き割った。メグルの頭上に、四散したレンガが落下してくる。

「《テラス・カーキネン》」男が別の呪文を唱えると、煙突だったレンガが空中で静止する。

「さて、ほんのちょっとばかりお仕置きが必要だな」光の壁が光の粒子となって、空に拡散していく。現れたのはエデューだった。

　エデューが薄ら笑いを浮かべながら、メグルの額に卵を握ったかのような軽く握った拳を突き付ける。

　メグルは反射的に目をつぶった。

　……、……。コツン。

「でこぴん……!?」メグルが目を見開く。

「だから言っただろ。『ほんのちょっと』お仕置きが必要だと」エデューが笑いながら答える。「あ、そうだった。ここから離れるぞ。そろそろ魔法が途切れる」

　メグルたちはレンガが浮遊している地帯から歩み出た。その数秒後に、レンガは重力に従って地面に落下した。

　ふと気が付くと、周りには人だかりが出来ていた。いぶかしげにメグルを見つめる。

「すまない、うちの弟子が迷惑をかけた」エデューが周りの人たちに説明を始める「正当防衛のつもりだっただが、上手く加減ができなかったらしい。基本的には優しいやつなんだ。さっきの衝撃魔法を威力を見たか、かなりの威力だ。彼には素質がある」

　周りの人たちは一応は、納得したようだ。メグルの扱いについては彼に一任すると。

「さてと」エデューがメグルに向き直る。「答えを聞きそびれていたな、どうだ？　私の弟子になるか？」

　エデューが握手の為の手を差し伸べる。

「さっきから弟子になる前提で話を進めてましたよね」メグルは握手に応じる。でも、さっきの説明がなかったとしてもおれは同じことを答えただろう。

「よろしくお願いします。エデュー師匠」

２章＿弟子入り直後から出発まで

　一連の騒動の後、メグルとエデューの師弟はエデューの家に戻った。

「今日から、ここがお前さんの部屋だ」とエデューがメグルに部屋を案内する。

　案内された部屋をはかつて二人部屋だったようで、ベッドと机が左右対称で配置されていた。向かって左側の範囲は中身が空っぽだったが、右側の範囲は持ち主のものが残ったままになっている。

「左のベットを使ってくれ」とエデューが言い残し、去っていった。

　メグルは入り口から見て右側の椅子に腰かけた。もう一方の椅子の背もたれには『アプレン』と彫刻されている。自分が座っている椅子はもともとは誰のものだろうと確認すると『ブーリアン』と彫られていた。

　メグルは兄弟子のものだった布団に潜り込んだ。部屋のほこりっぽさが気になるものの、眠気には耐えられなかった。細かいことは明日考えよう。

　翌朝、目を覚ましたメグルはあることに気が付く。椅子に彫刻されているはずの『ブーリアン』の文字が解読不能の記号に置き換わっていたのだ。それだけでは無く、もう一つの椅子の『アプレン』の彫刻やアプレンの遺留品も読めない文字に置き換わっていた。正確には『置き換わらなくなった』と表現すべきだろう。

「翻訳魔法の効果が切れている……」とメグルがつぶやく。

　メグルが部屋で出て、片っ端から部屋をノックして回る。

　寝室からエデュー出てくる。何かしら喋ってはいるがメグルには理解できない。唯一わかるのは彼を示す『メグル』という名詞だけだ。

　エデューは昨夜と同じように目・口・耳の三か所に翻訳魔法をかけた。

「これで、よしと。どうだ、聞こえるか」とエデューが言う。メグルにも理解出る声としてだ。

「大丈夫、聞こえます」

「言い忘れていたが、翻訳魔法は数時間意識がなくなると効果が切れる」

「――で、切れたときは再度、師匠にかけ直してもらうと」

「そういうことだ」

「ということは、弟子になるならないの以前に師匠のそばから離れられないじゃないですか」

「まあ、そうなるな」

　そのあと二人は朝食をとり、身支度をして、村の中央部へ向かった。先日のごたごたで破壊した建物を治すためだ。

「そうだ、口と言葉が一致してないんだ。洋画の吹き替えみたいに」ふと、メグルが気が付いた。

「ヨウガノフキカエが何だかは知らないが……、翻訳魔法は言葉が耳に入った瞬間に魔法でその人間が理解できる言語に置き換える魔法だ。だから、声と言葉が一致しないぞ」一呼吸おいてエデューが続ける。「ちなみに、君が発した言葉は、口から出たときに我々の言語に置き換わっている。目に映った文字も読む前に君の言語に置き換わっているはずだ」

　エデューはまず向かったのは、煙突が破壊された現場ではなく、左官屋だ。バラバラのレンガと成り果てた煙突をもとに戻すには、地道にレンガを積み上げてモルタルで隙間を埋めるほかないようだ。

「魔法で、元に戻すことは出来ないんですか」メグルがエデューに質問する。

「魔法で煙突の形に支えることは可能だ。だが、魔法で支えているだけでは、魔力が途切れた瞬間に崩れ落ちてしまう。私に出来るのはあくまでサポートだ」

　エデューは、左官工を呼び出す。

　作業現場へと向かった。

　煙突の修復作業は順調に進んでいった。メグルが散らばったレンガをかき集め、エデューが《カイナ・ティング》という物体を浮遊させる魔法で保持し、左官工がモルタルで隙間を埋めながら煙突の形に積み上げてく。

「そいつが新しい弟子か？」左官工がエデューに話しかける。「弟子を取るつもりはないとか、昔、言ってなかったか」

「昔のことだ。弟子ロスも１０年も経てば消えてなくなるさ」

「ならいいんだ。そういえば、堅物の方は元気にやってるのか？」

「イナーボーで魔法塾を開いているらしい」

　三人は煙突の修復作業を終えた。

　その日の食卓でエデューはメグルに質問を投げかける。

「こっちの世界に来た細かい経緯を聞いてもいいか」

「いいですよ。えーと、どこから話すかな……。あれは半年前のことで――」

　仕事を辞めて、いや、辞めるように促されて……。まぁ、とにかく、仕事を辞めました。

　今までの睡眠負債を全力で返すかのように布団に横たわること１ヵ月。１ヵ月経って動く元気が出てきたが、だけれども、再度仕事をする気は一向に起きなかったわけです。

　――で何を血迷ったのか、マイカーで日本一周の旅を始めました。理由なんてないです。ただ、いろいろな風景を眺めるのが好きだけで。あとは、こんな無駄なことに湯水のように時間を投入できる機会は当分訪れないと思ったからですかね。

　ルートは関東から時計回りに関東、から太平洋側を進んで、近畿、四国、九州、日本海側から、中国、北陸、東北、北海道、ぐるっと太平洋側に行って、関東まで戻りました。今思えば、ルートは逆の方がよかったかな、途中で予算が足りないことに気が付いて、車で寝泊まりしてたんですが、寒くて凍え死ぬかと思いました。予算が問題だと言われればそうですけどね。

　そして、出発地点の千葉に戻ってきました。千葉までは戻ってこれたんですよ、さらに言えば自分の町まで戻ってきています。

　ところが、不幸にもトラックにはねられてしまう。正確に言えばはねられそうになってしまうかな。一度死んで魔法で蘇ったより、魔法で単に移動しただけの方が気分的にいいので。

　駆け抜ける走馬灯。で、気が付いたら『こっち』に来ていました。

「――経緯はこんな感じですね」

　メグルは説明を終えた。

「やっぱり、戻りたいと思うか？」

　メグル、少し考えてから答える。

「人並みには、戻りたいとは思いますよ。でも、おれが帰ろうが帰らなかろうが、元の世界ではこれといった問題はないでしょうね」

　２日後、メグルは老朽化ししたお屋敷を衝撃波魔法で破壊していた。

　このお屋敷は、かつて偏狂な金持ちが増築に増築を重ねて肥大化した建築物だ。彼が亡くなった以後、３回の住人の入れ替わりがあったが、そのたびに３年も経たないうちに幻聴や不眠症を訴えて皆が去っていった。

　エデューがメグルに指示を出す。「この、壁一面に肖像画がかけられた部屋を頼む」「次は寝室だ」「この、山羊の頭骨と謎の人形が並んでいる部屋を頼む」

「なんとなく、不吉なところだけ任されている気がするんですが。呪われたりしませんよね」

「……。いざとなったら精神を落ち着かせる魔法をかけてやるから安心しろ」

「一度おかしくなる前提じゃないですか」

「ところで、《カイナ・オウ》は今日のうちに何回打った？」

「え？」強引に話の方向転換され、戸惑いながら考える。壁１面に対して大体２発放っているから……。「20回は打っているはずです」

「あと、何回打てる？」

「100回ぐらい」

　エデューが目を見開き、つぶやく。

「風景のストックなら、トップクラスじゃないか」

「ええ、風景を覚えるのは得意なんです。人の顔や教科書の中身は全然覚えられないんですけど、迷子になったこと生まれて一度もなかったです」

「あながち、予言は間違いじゃなかったかもしれないな」

「素人のゴリ押しなんてどうにでもなるでしょう。」

「そうとも限らないぞ。１対１弱点を突いて終わりだが、複数戦ならその風景のストックも十二分に活用できる」

　休日のある日のメグルとエデューはエデュー宅の書斎にいた。エデューが話を切り出す。

「正式に魔法使いになりたいと思わないか」

「正式？」メグルが聞き返す。「魔法使いにも正式な奴とそうじゃない奴がいるんですか？」

「いるぞ」

「――となると」メグルは自分を指さして「おれはモグリの状態ですか」

「グレーゾーンだ。弟子として正式な魔法使いの目が届くところで魔法を使う分には違法ではない。魔法使いとして認められるためには《機関》で登録する必要がある。その《機関》があるのがこの国の首都だ」

　エデューは本棚から地図を取り出し、机に広げる。地図の真ん中の四方八方に道路が伸びている一番大きな街を指さし「ここが首都だ」とエデューが言う。そして、南方の農村が点在するエリアから赤い丸が書きこまれた場所を指さし「ここがこの村だ」と言う。

　首都と今いる村の間に、バツ印でが記載されている箇所がある。

「師匠、ここは埋蔵金か何かですか」メグルをバツ印を指し示しながら質問する。

「そこは戦場の跡地だ。７年前に停戦し、それから今日まで魔法使い間での戦いは発生していない。……まぁ、表面上はな」

「よかった……。こっちに来たのが戦時中じゃなくて」

「それはそれとして、首都にもう一つある。国立図書館と《機関》に所属している研究者達だ。お前さんが元の世界に戻る方法を探るならこの辺の協力が必要になるだろう」

「この世界で残る。元の世界に戻る。どちらにしても首都に行く必要があるってことですね」

「そういうことだ。《機関》での登録には、色々な魔法を身に着けてもらう必要があるが、旅の最中にでも覚えてもらうさ。先生役にはいくつか候補がある」

　メグルを首都につれていくと決めた次の日から、２人は旅の準備を開始した。

　初めに手を付けたのは足の確保だ。馬売りを訪ね、馬小屋の中から旅の相棒となる馬を選び出す。メグルは栗毛の牡馬、エデューは黒鹿毛の牝馬を選んだ。

　糧食として、市場から買い込んでいく。

　メグルの使用する用具の一部はアプレンが残していたものを利用することにした。

　出発の日になった。

　二頭の馬とそれにまたがる二人。それをそれを見送る人々は見送りの言葉を贈る。。

「故郷に帰れなく方法が分かるといいな」

「駄目だったらいつでも、この村に戻って来いよ」

「行ってきます」に手を振りながらメグルが応える。

　メグルとエデューは馬に拍車をかけ、旅路を駆けていく。

３章＿青使い編

生徒リスト

ネグラ：男の子。黒のイメージ。好奇心旺盛だけど、なんでも知りたがるタイプ

シリラ：女の子。イメージはウィッチャーのシリ

　村から旅立って５日後、メグルとエデューはイナーボー地方に来ていた。イナーボー地方は最東端の海に面した地方だ。

　メグルたちのいる地点と海の間は高台になっており、現在地からは海は望めない。だが、風は海の存在を伝えている。

「ここからでも、潮の香がしますね」とメグルがエデューに話しかける。

「そうだな。ここの高台を超えれば港町までたどり着くはずだ」

　二人は高台の頂上にたどり着いた。眼下には港町が広がっている。

「街の南東の岬にある真っ白の灯台が見えるか」エデューが指さしながら告げる。メグルがうなずくとエデューが続ける。「あそこに私の弟子だったブーリアンが住んでいる」

「確か、おれの使っていた部屋を以前の使っていたひとですよね。今は灯台守なんですか？」

「本職ではないのだが、海が一望できる場所に住みたいとの理由で敷地内に家を建てさせてもらったらしい。本来の灯台守が動けないときは代わりに仕事するときもあるようだ」

　エデューは説明を続ける。ブーリアンの３年前から地元の子供たちに、魔法塾を開いている。塾の設備は灯台付近に新しく建築したらしい。本来の灯台守が許しているのかメグルは疑問に思ったが、灯台守とは幼少期からの友人で、魔法塾も灯台守からのアイデアから始まったものである。そして、その魔法塾にしばらくメグルを入れるつもりらしい。

「その話って、ブーリアンさんに伝えているんですか」

「多分大丈夫だろう。あいつも私の弟子だから言うこと聞いてくれるだろ」

　メグルは特に反論することもなく話を終わらせた。

　多分、文句をいうがなんやかんやで兄弟子は受け入れてくれるだろう。そう期待した。

　メグルたちは高台から見えた港町を中継し灯台のある岬を目指す。宿を物色しながら潮風の香る石畳を進む。

　メグルたちは岬にたどり着いた。２人は馬を繋ぐ。周囲のを見渡す。真っ白の灯台とその右隣には同じく真っ白の石造りの建物ある。灯台か少し左に２件の建物ある。手前の建物には『イナーボー魔法塾』と看板が掛けられていた。

　耳を澄ますと、子供たちの声とそれに混じって男性の声が聞こえてくる。

　エデュードアをノックする。建物内の音がやみ、ドアから青年が出てきた。

「イナーボー魔法塾のブーリアンです。なんのご用――」言いかけてる時に相手がエデューであると気づく。「はるばる何の用ですか、エデュー師匠」

「せっかく立ち寄ったので、かつての弟子が元気にしてるかどうか顔を見に行こうと思ってな。ついでに、一つ頼み事をしたいのだが」

「ついで……ね。どっちがメインの用事なんだか……」

　ブーリアンがメグルに目を移す。

「もしかして、頼み事はその連れについてですか」とブーリアンがエデューに言う。

「察しがいいな」

　ブーリアンは「塾を切り上げてくる。少し待っててくれ。細かい話は中でしましょう」と告げ、塾に戻っていった。しばらくすると子供たちが次々出てくる。

　「中にどうぞ」ブーリアンが戻ってきて二人に告げる。「ようこそ『イナーボー魔法塾』へ」

　魔法塾内の、ブーリアンの仕事部屋で２人の魔法使いは言い争いをしていた。その内容はメグルを魔法塾に入れるかどうかだ。

「うちの、塾生見たでしょ。うちは児童が対象だ。そいつは年齢的に対象外だ」とブーリアンが反対する。

　メグルは先ほど目にした塾生たちを思い出す。確かに、さっき塾の建物から出てきたのはみんな子供だった。

「入塾申請書の条件には、年齢について書いてないぞ」対してエデューは、手に持った入塾申請書をひらひらさせながら反論する。なお、入塾申請書はブーリアンの机に積まれていた未使用の中からエデューが勝手に一枚拝借したものだ。

　ブーリアンはエデューの手にしている入学申請書の項目を指さす。

「年齢はひとまず良しとしますよ。『保証人』『契約者との関係』はどうするんですか。エデュー師匠」

「もちろん。保証人はエデュー・ジェザーヴィーヌ、契約者との関係は師匠だ」

「ほぼ他人……。そもそも、君はどこ出身だどこの出身？　翻訳魔法をかけてるよな」ブーリアンはメグルに質問する。

「おれは日本人で、こことは別の世界から来たんだと思います」

　メグルの返答を聞いてブーリアンが、エデューの耳元のメグルに聞こえないようにささやく。

「あんたが言わせていたり。正気を失っているわけじゃないよな」

「いいや、彼が言っていることは本当だよ。そんなわけで、彼に身を守る術を教えてやってくれないか」

　ブーリアンが渋々承諾する。「わかった、メグルの入塾を認めよう。明日の10時から開始だ。遅れるなよ」

　イナーボー地方に訪れてから二日目の朝、メグルはイナーボー魔法塾へ向かっていた

TODO:みんなに紹介する下りを追加する。

紹介:

　え、いい大人じゃんとか言われる。

「それでは授業を始める。今日の授業は歴史だ」ブーリアンが教壇に立ち説明を始める

　この国では、７年前に戦争があった。今日では『第三次魔法戦争』と呼ばれている。魔法使い複数人で行使する、広範囲を攻撃する魔法や城壁ごと破壊する威力の魔法が多く用いられた戦いであった。

　この戦いにより魔法使いの半数が犠牲になった。停戦後、生き残った上位の魔法使い協議が行われた。そこで『魔法使い反戦協定』が結ばれた。内容を要約すると、魔法使い同士で争いを起こすな、軍事に介入するなといったところだ。

　そして、人を殺めるための魔法の使用は禁止となり、次の世代に教えることも禁止された。

　以上が今回の授業の要約である。

「今日の授業は魔法の属性についてだ」ブーリアンが話始める。「まずは復習から始めよう、すべての属性を答えられる子はいるかな」

　塾生たちが、元気よく手を挙げている。ただ一人メグルを除いては。

「はい。ではメグル君、答えは」ブーリアンが視線をそらしてメグルを指名する。

「えーと……、木、火、土、金、水ですか？」

「残念、違います。次、シリラさん」

　ブーリアンが銀髪の少女に質問する。

「まずは青。それから赤と白」少し間考えて「そして緑です」

「正解！　ちゃんと復習しているようだね。ここから、新しい内容だ。各属性の役割について説明するぞ。まずは青。これは君たちにすでに教えているものだ」

「打消し呪文！」塾生たちが一斉に言う。

「その通り。先生の得意技でもある打消し呪文が青属性の代表的な呪文だ。その他にはテレパシーなど精神にかかわる魔法も青属性だ。他には翻訳魔法も該当する。総じて魔力や精神そのものに干渉する特徴がある。その反面、直接的な攻撃手段がないのも特徴だ」

　自分の専門分野だから、メグルにはどことなくブーリアンが上機嫌に見えた。

「次は赤属性。この属性は炎や雷を発生させ相手を攻撃するのが得意だ。白属性は防御魔法――光の壁を作ったりするのが有名だな――や身体強化を得意とする。緑属性は自然に作用する属性で動植物を強化して使役したりする」

　ブーリアンが一通りすべての属性を終えた。

一人の少年がおずおずと手を挙げる。

「どうした。ネグラ」ブーリアンが促す。

「先生が話していない、黒って属性あるがあるのは本当ですか」

「本当だよ。黒は戦いに特化した属性で、命そのものを奪うことに焦点を当てている。今となっては『魔法使い反戦協定』によって黒属性そのものが禁止されている。それはそうと、君はどこでそれを知ったんだい？」

「先生から借りた本からです」

「貸した入門書は子供用ものを渡したからそこには黒魔法のことは書いてなかったと思ったんだが」

「入門書じゃなくて一緒に借りた辞書に書いてありました」

「そっちはノーマークだった」

《実技の時間》

　本日は生徒たちが浮足立っている様子だ。

「今日は実技の時間だ、みんな外に出るぞ」ブーリアンが塾生達に呼びかける。

　みんなが外に集まる。

「今回が初めての実技の人はこっち来てくれ、やり方を説明する。他の子たちは各自相手の魔法を打ち消す練習をしていること。何かあったら、声をかけてくれ」

　メグルと他２人がブーリアンの下に集まる。

「さてと、では打消し呪文の方法を説明しよう。打消し呪文とは、相手が放ってきた魔法に別の魔法をぶつけることによって相手の呪文を無力化する魔法全般を指す。説明するより実際に見せようか」訓練中の塾生に呼びかける。「ネグラ君。少し手伝ってくれないか」　塾生のネグラが呼びかけに応じてこちらにやってきた。

「先生。なんの用ですか」ネグラがブーリアンに訊く。

「打消し呪文の実例を彼らに見せたいので、先生に向かって水を打ってくれないか」

「はい！」ネグラは返事し、水鉄砲に印と手で形作る。右手の親指を立て、中指から小指を握り、人差し指でブーリアンを指す。まるで、拳銃だなとメグルは思った。

　対するブーリアンは五本の指を開き、水平に構える。こっちは印は扇だとメグルは思った。

「いいですか」ネグラが確認する。

「いいぞ。打ってくれ」

「《スミル・シャガン》」

　ネグラの指先から水が勢いよく発射される。水量はないが勢いがある。例えるならちょっとお値段高めの１リットルペットボトルほどのタンクがついている水鉄砲と同じくらいの威力だ。

「《ナギ・ゼクー》」ブーリアンがネグラの魔法を吹き消すかのように、手で仰ぐ。

　青白い靄がネグラの魔法と混ざり合い、霧散する。

「これが、打消し魔法。あらゆる魔法を無かったことにする、最良の防御策だ」

「これから君たちにも実践してもらう。では、メグル君は魔法を使いために必要なものが３つある。なんだか分かるか？」

「印、呪文、魔力です」

「その通り、今回説明する《ナギ・ゼクー》は打消し魔法の中で基本に当たるものだ。印はこのように手を扇状に広げて、相手の呪文に対して動かす」

　メグルたちが、ブーリアンの動きを真似る。

「魔力についてだが、《ナギ・ゼクー》は青属性だ。そのため思い浮かべる風景も青属性に対応した場所を思い浮かべる必要がある。海、川、湖等の水に関する風景だ」

　メグルは旅行中に訪れた、日本一周の旅で訪れた安居渓谷を思い浮かべた。

「そして、呪文は《ナギ・ゼクー》だ。さあどうぞ」

「《ナギ・ゼクー》」メグルが手を払いながら呪文を唱える。

　メグルの手元から青白い靄が一瞬だけ出て、すぐに消えた。

「ちゃんと出ているみたいだな。では次。彼の魔法を打ち消してみろ。さっき出た青白い靄を呪文にぶつけるんだ」

　ネグラがメグルに目線で合図を送る。

「《スミル・シャガン》」ネグラの指先から水が発射される。

「《ナギ・ゼクー》」メグルが対応して、打消し魔法を放つ。魔法は狙い通り相殺して

授業のネタ

済み

①歴史の授業

　７年前に戦争があった。

　『第三次魔法戦争』

　魔法使いの半数が、犠牲となった。

済み

②属性解説

五属性（色）

対象の風景はMTGのイメージそのまま

白：防御、身体強化

青：打消し、精神操作（殺傷能力がないと生徒には説明する。）

黒：殺害、代謝促進による回復

赤：炎、雷

緑：生物に関連するもの

説明の際は、黒をわざと後回しにする。

ブール：今日は、属性の復習から始めよう。まずは、『すべての属性に種類を答えられる子はいるかな』」

　手を挙げる描写。

生徒：まず、青。それから、赤、白、（ちょっと悩んで）緑」

それぞれ

青　生徒：打消し。　補足：相手の魔法そのものに働きかける。精神を読み取る。など、反面、物理な干渉はできない。攻撃手段もない。

赤　生徒：炎をだす。雷を出す。

白　防御や身体強化。

緑　動物と話したり、植物を成長させたりする。

黒系統の話

ある生徒が話を切り出す。

生徒　：先生が話していない、黒って属性あるがあるのは本当ですか。

ブール：本当だよ。　黒は戦いに特化した属性で、命そのものを奪うことに焦点を当てている。

　　　　最も、先の戦争以降は属性そのものが禁止されている。

　　　　君はどこでそれを知ったんだい。

生徒　：先生に借りた本から。

ブール：貸した入門書は子供用ものを渡したからそこには黒魔法のことは書いてなかったと思ったんだが。

生徒　：入門書じゃなくて一緒に借りた辞書に書いてありました。

③実技

野外に出て魔法対決

・攻撃は水鉄砲魔法のみ。

・相手の魔法を打消し呪文で打ち消す。

・使える風景は制限あり。

　・限られた風景を有効活用できるかが重要。

　・メグルの強みは無尽蔵の風景のストックなので、風景の使用が制限されると弱い。

　・連想速度は速い方だが、魔力の無駄遣いが多いので、最終的に攻撃も防御もできなくなって負ける。

　殺傷能力のある魔法は禁止（表向きには）。

　　ホフル系統は完全禁止。

　　ブーリアンが用いる、精神操作も禁止

終盤　はぐれ魔法使い襲撃シーン

敵設定

・戦時中に敵対

・ブーリアンとはぐれ魔法使いは知り合い。他生徒とメグルは面識なし。

・敵人数　5人くらいを想定。

防御は完璧だがじり貧

メグルに防御を任せて、ブーリアンが相手に攻撃。

ブーリアンが相手を殺そうとした理由の一つに、相手が黒魔法を使おうとしたのも入れる。

ブーリアンの相手を殺そうとするが止める。

「青魔法に直接相手を攻撃する呪文は存在しない。だけど、相手を同士討ちさせる方法はある」

４章＿赤使い編

舞台山岳地帯

名前候補　カンナラビ

・人気が少ない

・古戦場（休眠状態のゴーレムが所々にあるのは、かつて戦いがあったため）

・修行堂（オープンなブーリアン魔法塾に対して、閉ざされている感じ。時代遅れであるとコッチネラ自身も理解している。）

コッチネラの追加設定。

・ほんの少しだけ、エデューの弟子になったことがある。

・赤専門の完全特化型。ブーリアンも特化よりだがそれよりより顕著。

　万能型　エデュー、ブーリアン、コッチネラ　特化型

・他の色の魔法はほとんど使えない。

　コッチネラの一族の犠牲者が多いのは、赤使いは好戦的な傾向があるから。

５章＿首都編

ヨグルフがワタリを勧誘するシーン

　ワタリが村人たちに殺されそうになっているところを助ける。

　エデューがメグルを助けているシーンと対になっている。

ヨグルフ：（こいつらを騙されるだけの）力が欲しいか。

ちょっとずつ、魔力を教えていく。

中級魔術を倒せるまで上達する。

　魔法で支配していた、はぐれ魔術師を返り討ちにして、周りの人に褒めたたえられる。

ヨグルフ：惜しいな、適切で時代あったならば。英雄となれたのに。

　以前、戦争あった。

ワタリ：どうせ、つれてこられるなら、もっと面白い時代がよかった。

ヨグルフ：いや、直に面白くなる。

　　　　　私のもとに来ないか。

　名簿を見るシーン

・魔術師殺し、黒幕（ヨグルフ）、エデュー師匠はSランク

・ブーリアン、コッチネラはAランク

・アプレンはCランク

・メグル、ワタリはDランク

・最初は基本的にEからスタートする。

　今後の敵役３人の名前の公開。

　除名日で、戦争時にかなりの数がなくなっている。アプレンは戦争が始まる前に行っている。ヨグルフは生死不明。

魔術師殺し戦の直後の処理

魔術師殺しは戦闘不能。

ワタリが遅れて登場。

魔術師殺し：ワタリそいつ殺せ。

ワタリ　　：依頼の内容くらい覚えておけよおっさん。

ヨグルフテレパス：そいつは口封じをしろ

ワタリが、ヨグルフに近づいて、口封じ（舌を切り落とそうとする）をしようとする。

ヨグルフ：すまない。指示がわかり辛かったようだな。言い直そう。そいつを殺せ。

ワタリがためらう。

ヨグルフテレパス：ならば、我が代わりに手をかけよう。

ヨグルフが魔術師殺しに、人体爆弾化魔法を掛ける。

　・効果：殺さないと一定時間で爆発する。

ワタリが魔術師殺しを殺す。

ヨグルフテレパス：なんだ。できるではないか

ワタリもショックを受けている描写。

メグルとワタリで、何で殺したのかの言い合い。

途中から取っ組み合い、で途中でメグルは火炎魔法を構える。

ワタリ挑発：ほらやってみろよ。　　（伏線：再戦時にメグルの方からワタリを挑発して、魔法のパワー勝負に引きずり込む）

ワタリがメグルを返り討ちにする。

ワタリ：お前は日本の風景だけだが、俺が使える風景は世界だ。

スタンガン魔法で気絶させて回収しようと思ったが、憲兵が来たのであきらめる。

メグルvsワタリ

メグルandワタリvsヨグルフ

バトル構図

・帰還ポータルが開いている間に、ヨグルフの妨害をかいくぐり、元の世界に帰る。

・メグルとワタリは、魔力を消耗しているので、残弾が限られている。

・ワタリに人体爆弾化魔法を掛けている。

・メグルとワタリの共闘で、ヨグルフを出し抜くシーンを書きたいだけ。（）